
噂のたんてーさんっ！

コーンマン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

噂のたんでーさんっ！

【Nコード】

N7606A

【作者名】

コーンマン

【あらすじ】

「それはとある街にヒッソリとたたずむ、とある探偵事務所の物語…。まあ見てって下さいな」

第1話：『とある街のとある探偵事務所より愛を込めて』

とある街にひっそりと存在するとある探偵事務所

どうも、こんにちは。今日も良い天気ですね。

…え？お前は誰かって？……ああ、失礼しました。ボクの名前は『トオル』この探偵事務所のお手伝いをさせてもらっています。

そして今は日課のお掃除中なんですけど…んーっ！日差しが気持ちよくってちよっと休憩してます　ほんわか

すとーーん！

…あれ？今日の前を何かが亜音速で通り抜けたような気がするね。やっぱり壁にナイフが突き刺さってる

「…ッうわあああっ！」

びっくらこいた！やや小便チビったもん

「なななな何するんですかシンさんっ！！」

ナイフが飛んで来た方には案の定『あの人』が黒いフカフカチエアーに腰掛けている

「ああ？掃除サボってる愚かな助手に愛の鞭をくれてやったのよ」

あと数ミリずれてたらとてもグロい映像が流れましたよ？

「誰もサボってなんかいませんよっ！」

「ハイ嘘〜！この俺がすっかりと見てましたあ〜。『ほんわか』じゃねえよ殺すぞハゲ」

エロ本顔に乗せて爆睡してると思ったらすっかり起きてたのね

あ。紹介します。この全身黒スーツ黒ハット赤ネクタイのいかにも怪しいヒトが『シン』さんです。この名も無い探偵事務所の所長にして唯一の探偵さんです。

「文句があるならシンさんも掃除して下さいよ〜。毎日毎日どう過ごせばこんなに汚せるんですか！？」

ボクの隣には牛乳パックやらエロ本やらお菓子の空箱やらエロ本やら空き缶やらエロ本やらが…まさに『山』のように積まれている

「ぬおおおおッ！！俺のエロ本〜ッ！」

あ、ゴミの山に突っ込んだよ。そしてエロ本をもの凄い速度で回収してるよ。残像が見えるよ。

「貴様俺のエロ本をゴミのように扱うとはいい度胸じゃねーか」

エロ本の回収を完了したシンさんは鬼の形相だ。

「そんなに大事なモノならそこら辺に読み散らかさないで下さい」

「んだとクソハゲが！死ぬか！？いつぺんあの世でスーパーサイヤ人3目指すかクルアツ！」

エロ本をゴミ同然に扱われた事にかなりのご立腹のようです

だってホラ、またナイフ持ち出してるもん

ちなみに私立探偵シンの趣味は『エロ本集め』と『ナイフのコレクション』だ

「わわわわッ！スミマセンでした！ボクが悪うございましたっ！！だからナイフをしまつて下さい！」

シンさんのナイフの腕は超一流です。どんな場所にもサククリ刺す技術は素晴らしいと言えません。

「うつし。そんじゃあコンビニで『もひもひランデブー』買ってきなはれ」

急にキャラ変わったよ！なに？京都？舞子はん？

「『もひもひランデブー』って…エロ本じゃないですか…。ボクの歳じゃ売ってくれませんかよ」

ちなみにボクの年齢は15歳。学校に通いながらこの探偵事務所働いている偉いコなんです。

シンさんは年齢不詳。見た目は20代前半なんだけど…

「あ？根性で売ってもらえよハゲ。土下座してでも売ってもらえハゲ。店員殺してでも売ってもらえハゲ」

「店員殺したら誰に売ってもらうんですか！」

ちなみにボクはハゲていません。フッサフサです。

「黙って行けやあ！このカメモシ。」

カメモシ！？トロい上に臭い。最低！

コンコン

事務所の扉を叩く音（約1ヶ月ぶり）

「…あ、はあい。今開けまーす」

扉を開けると、そこにはうつ向き加減な女の子が立っていた。

「…ようこそ。『とある探偵事務所』へ」

シンさんが椅子に腰掛けながら少女に歓迎の意を送る

・ ・ ・ ・ ・

「……………ってこの事務所名前『とある探偵事務所』だったの——
——っ!?!?」

助手歴1年にして事務所の名前を知ったボクでした。

第1話：『とある街のとある探偵事務所より愛を込めて』（後書き）

第1話、読んで下さりありがとうございましたm（――）m
がんばりマッスル！古

第2話：『もひもひランデブーには完全版と通常版があるんスよ』

どーも皆さんこんにちわ。トオルです。

さて、前回名前が発覚した『とある探偵事務所』ですが…一ヶ月ぶり位に訪れた依頼主は、なんとわずか8歳の少女でした。

今はシンさんが泣きじゃくる少女から話を聞いているところです。

「…つまり、行方不明になったネコたんを探して欲しい…ってことアルね？」

うわーマンガみたいな中国人がいるよ

「…ヒック…ぐすんっ…」

少女は溢れでる涙と鼻水でグシャグシャになりつつも、シンさんの質問に頷いてます。

「…よっぽど大切なネコなんだな…」

前回シンのダイブにより崩壊したゴミの山を片づけながらも、少女の涙に心奪われかけるボク

あ、シンさんも心打たれたのか、少女の頭をポンポンしてる…さすがに子供には優しいんだね

「おいガキ。テメエ金は払えるんだろーな？」

アンタいたいけな少女になんちゅー事吐いてやがるんですか！

「し…シンさん！ここはタダで引き受けるのがセオリーでしょっ！」
こんな小さな子供に、シンさんが請求する破格の依頼料なんて払えるワケない！

てか8歳の少女が探偵事務所に来んのも無理矢理すぎる

「ホラよ、好きなだけ受け取れや」

えー………ッ！なんだあのコ！今札束バラまいたよ！しゃべり方が『世の中カネさえあればなんでも出来る』ていう思考のイヤな金持ちみたいになってるーっ！

「ウシャシャ。すまねえなアニキ」

拾ってるよバカ探偵！なんだウシャシャって

「じゃ、アタシお家帰るネ」

そう言い残し、少女は帰って行った

「うっし。搜索開始だトオル」

珍しくヤル気満々だ。そりゃああんだだけ札束貰えばやる気も出るわ…

「…そのまえに」

？

なんだろ？準備は一通り終わったし…

「途中で『もひもひランデブー』買ったちゃ」

ラムちゃんのもりか。　とか…つのだ　ひろのもりか。

「それで？探すネコってどんな感じなんです？」

事務所の階段を降りながら、今回の依頼について聞いておく

「あ？えーと……………雑種？」

．．．．．

殺していいですか。

「まさか1時間も話してて…ネコの特徴とか聞かなかったんですか
っ？」

「うむ」

うむ。じゃねーよボケ。この無能探偵が！

「…はああ…」

ボクはトボトボと歩き出した。なんか途中のコンビでアホな探偵が
「なんで『もひもひランデブー』完全版』売り切らしたんじゃこのク

ソナীবがああっ！」

とかバイトの高校生に泣き叫んでいた事とか、慌てて止めようとした店長の髪が全て引きちぎられ、本物の髪の毛が瞬時にカツラと化した事などは見ませんでした。

第3話：『新刊・もひもひランジェリーと猫』

「むふふ…」

コンビニを崩壊させたシンさんは、別のコンビニで購入した『もひもひランデブー完全版』を熟読している（歩きながら）

「…まったく、シンさあん！これからどうする気ですか？」

…ダメだ。完全にエロ本に入ってる

だけどホントどうしょ…肝心のネコの特徴が分からないじゃ…

「…あれ？君は…」

そこには依頼人の少女が立っていた

「…あのお…」

よほど人見知りが激しいのか、少女は恐る恐る話かけてきた

「ちょうどよかった！ゴメンね。ネコちゃんの特徴とか聞いてなかったみたいで…」

「あ…はいっ！」

どうやらこのコもその事で来たみたいだ

「…で、ネコの特徴は？」

「寝冷え！」

「…はい？」

「うわっ！」

なんだ？いきなり何かがボクの頭を踏んでいきやがった！

「…ニヤアゝおふん」

「…ネコ？いや語尾おかしくね？」

「寝冷え！」

だからこのコさっきから何言ってるの？

「ニヤア！…おふん」

無理しておふんて付けんなバカネコ

…あー、逃げちゃったよ変なネコ

「うっ…寝冷え…どおして逃げるのお…？」

…そうか！今のネコが捜してたネコなのか！

もしかして『寝冷え』って…名前？

「『寝冷え』は自由になりたいのさ」

変態探偵が泣きじゃくる少女の肩をポンポンしてる。ああ、『もひもひランデブー完全版』読み終わったのね

「うう…寝冷え…」

…まだ8歳の子供だもん。大事なペットがいなくなれば、そりゃ悲しいよ…このコのためにも寝冷えを捜さなきゃ！

「世の中諦めが肝心やで？お嬢ちゃん」

黙れ関西人くずれ

「ちよつとシンさんっ！そろそろ仕事して下さいよ！」

「誰もが貴様の思い通りになると思ったら大間違いだぞハゲがッ！」

ダメだこの人。完全にやる気失ってるよ。だって目線が書店に並んだ『もひもひランジェリー』に釘付けだもん。
なんだランジェリーって

「ランジェリー」

口に出しちゃったよ！

「お願い…寝冷えを捕まえて下さい…」

ホラ、このコ泣きそうじゃん

「…金ならいくらでも払ってやるからよお」

出たー！ーッ！『世の中力ネさえあればなんでも出来る』っていう思考のイヤな金持ちキャラ！

「御意」

失せるクソエロス。また札束拾ってんじゃねーよ。

「よし！行こうかトオル君！いたいけな少女のために…！」

札束を内ポケットに詰め込みながら吐くセリフじゃねーよ

「お兄ちゃんたち…お願いします」

ぺこっとお辞儀をして去っていく少女
かわいいなあ

「む！トオルっ！いたぞ…」ネコジャラシのような単純な畏にたやすく引つ掛かる下等生物『が』

普通にネコって言えばよ。てかネコジャラシって言った時点で既にネコって言葉発してんじゃねーか

「ニヤアアおふん」

だからその語尾はなんだ！

「貴様あ！誰に向かって『おふん』などと言つ下品な言葉を吐いてやがるッ！」

なんか通じてるし

「ちょ…シンさんっ！」

あーあ、ネコに本気になつちやつたよ。ナイフ投げすぎでしょ。てかあのネコスゲエ！全部かわしたよっ！

「ぶっ殺してやるああああッ！」

うわ…ネコにとびかかつちやつたよ変態探偵

「またれよ！」

…？

「…え…」

誰の声だろ？

「話を聞いてくれぬか？」

寝冷え喋った――――――ツ！

「なんだ？」

普通に対応してるシンさんがスゲエ！

「うむ…拙者、名を『寝冷え』と申す者。今まではサクラ殿のもとで幸せに暮らしておった…」

サクラ…あのコの事が

「しかし、拙者は追われる身、サクラ殿に拾われ3時間…これ以上迷惑をかけることは出来ぬ」

3時間とか早っ！たいして思い出ねーじゃん

「ま、待つてよ！君が誰に追われてるかは知らないけど…一番悲しむのはサクラちゃんだよ！？」

「…それでも…拙者は…おふん」

もう語尾にはツッコみませんよ

「…そうか…わかった。あのコにはそう伝えておくぜ」

…シンさん。

これで…いいのかな…あのコの気持ちを考えると胸が痛むな…

「……かたじけニヤイぼむ」

急にネコっぽくなった上に語尾が異様な変化をみせた事はこの際気にしません

「……寝冷え…」

寝冷えは哀愁と猫臭を巻き散らし去って行きました

「お兄ちゃんっ！」

あ…サクラちゃんだ

「寝冷えは？寝冷えはどうしたの…？」

「それが……」

「俺が話そう」

シンさん…こんなツライ役目を自分から…

「寝冷えはな…」

……

「雨宮さんがキトクな上によそで作った愛人との不倫が本妻にバレてしまったので行きますおふん…だそうだ」

……

は？

雨宮さんて誰！？てか寝冷え修羅場確定じゃねえか！！

「そっかー。雨宮さんが絡んでるなら仕方ないかー」

雨宮さん何者よ

「そーゆーこつた」

「シンさん…違…もこつ」

シンさんが口を塞ぐ

「もがもが」

「いいんだよこれで」

…そうか…サクラちゃんを悲しませないためにあんな嘘を…

あの嘘で納得したサクラちゃんの脳味噌が心配です

その後、実は町一番の大富豪の一人娘だったサクラちゃんに、たんまり報酬を貰ったシンさんは早速『もひもひランジェリー』を買いに書店に出かけた（小走りで）

ちなみに、たんまり貰った報酬はボクの手には全くわたってきませんでした。

第4話：『探偵さんが学校で学ぶべきは道徳心にほかならない』

「あちい」

「そうですねえ」

どーも皆さん。いやゝ夏です。酷暑です。

クーラーなんてついてない』とある探偵事務所』では扇風機3台が総動員で風を送ってくれています。

シンさんに。

「あー、あちい」

扇風機3台を独占してもまだ暑いかな

「あ、もうこんな時間…それじゃ、ボク行きますね」

「おう」

扇風機に向かつて『あああああ』とかやってるシンさんを事務所にひとり残し、ボクは外に出た

今日は学校。

朝、7時頃に1度事務所の掃除をしてから登校するのがボクの日課です。朝・夕とお掃除をしないと事務所は1日でゴミ屋敷へと姿を変えてしまいますから…。

まったく…どうしてあの人は一晩であそこまで散らかせるのか不思議

議でなりません。

「トオル！おっはよー」

「あ、おはよー」

数人の友人たちと軽くあいさつを交す。彼らはボクが探偵事務所の助手（家政婦？）をしている事を知りません。

なぜなら『とある探偵事務所』及び『探偵シン』は、この街の七不思議のひとつになる程違う意味で有名ですから…

ある者は真夜中に『べっこうあめく』とか絶叫しながらチャリンコで川にダイブしたシンさんを見たと言い、またある者はあの探偵事務所からは時折ナイフが飛んでくるなんて話を……… ナイフは事実です。はい。

そんなこんなで、この街の人間は、あまり『とある探偵事務所』に近付こうとしません。

キンコーンカーンコーン

「んあ？」

しまった！午前の授業全部寝ちゃったみたい……もう昼休み。

ボクは友人数人と机を合わせ、手作りの弁当を開く。そして何気なしに外に目をやってみる。

ああ、今日も快晴：グラウンドではどっかの野良犬が蝶々を追いつけ回してるし…飛んでる蝶をナイフが撃ち落とすし…落ちた蝶を犬が食………

ナイフ？

「ぐわっはっはっは！ざまーみるクソバタフライ！！」

なにやってんだ変態！ここを何処と心得る！？貴様とは対極に位置する学び屋ぞ！

「おいグラウンド見てみるよ！なんか居るぞ？」

げ…気付かれた。

シンさんは次の標的を野良犬に決めたようで、野良犬を本気で追い掛け回している

「ぐるあああッ！待ちやがれクソパグチーズ！！」

多分パグとマルチーズを気分で合わせちゃったんだろーな。てか明らかに野良犬ブルドックじゃん！

「恐ええッ！」

クラスの誰かが言った。うん、そりゃあ怖いよ。無害な野良犬相手に本気でナイフ投げてんだよ？常人のする事じゃないさ。さすが七不思議。

「…あ。」

生徒の誰かが教えたのか、数人の教師がシンさんの所へ向かった

嫌な予感が…

「ぎゃーーーーーっ！」

ハイ的中！

事もあるうちにシンさんは標的を体育教師に切り換えやがりました。おーおー逃げとる逃げとる。必死だな体育教師。半ベソじゃん。

「俺さまの暇潰しを妨害しやがってえええ！クソニツプレスがああああつー！」

その声を敷地中に轟かせながら体育教師にナイフを投げまくるバーサーカー。

多分体育教師のタンクトップから乳首がポツコリ出てたんだね。

「……え？ちよつと…」

グラウンドから校舎に体育教師が逃げてくる

「キヤアアアッ！」

「うわああッ！」

などといった悲鳴が学校中に響く。そりゃそうさ、体育教師が避けたナイフが教室に飛んでくるんだもん

どうやら体育教師を見失ったらしく、シンさんは廊下でキョロキョロしてる

…あ。

「…ヤバ…」

シンさんとバツチリ目が合ってしまった。
もしここで『おトオル』とか声かけられたら明日から晴れてボクも七不思議の仲間入りだあああ！

「……………」

あれ？

シンさんはなにも言わずクルリと背を向け教室から離れて行く…

……まさかボクの立場を考えて……？シンさん。ゴメンよシンさん！ボクは自分の立場ばかりを考えて…シンさんの気持ちなんて少しも考えてなかった……

「よおトオル。今朝ぶりー」

ありがとうシンさん。わざわざ放送室を占拠して全校舎に語りかけてくれて

ぶっ殺すぞ。

その日からボクは晴れて七不思議の仲間入りを果たしました。

第5話：『悔しい時には遠慮せず泣き叫べばスッキリするかもね』

どーも皆さん トオルです。 いやー暑い！たいへんな猛暑です。
今日は休日です。 休日は大体シンさんの所で家事をこなしつつもの
んびりするのが日課です。

そーゆーワケで事務所の階段を登ってます。

我らが『とある探偵事務所』は3階建てビルの最上階に位置し、事
務所へ行くにはこの暗くて狭い階段を上がるしかないのです。

「シンさん。 おはようございます！」

事務所のドアを開け、にこやかに挨拶。 やっぱ1日のスタートは
心地好い挨拶でしょ！

「オイーツス」

「おいーっす」

ホラ、シンさんだって一応返してくれました。

…2人？

「あ、アキホ！なんでココにいるんだよっ！」

シンさんと一緒にソファーでゴロゴロしてるのはボクの妹『アキホ』
です。

「だってえゝ暇なんだもおん！」

てゆーか家族にもココのと言ってないんだよ？

「そんな事よりなんでココ知ってるんだよっ！」

「おー、俺がお前ん家から連れてきた」

死ね誘拐犯！

「シンさん。どーゆうつもりですか？」

多分『暇潰し』とか言っただろーな

「暇潰し」

ホラね……………『暇。』ってなんだー！ツ！

「とにかく帰るぞ！父さんも母さんも心配してるからさ」

「心配？なんでー？」

当たり前だろ。娘がこんな全身真っ黒の探偵に連れ去られたら誰だ
って心配するわ

「あー。ちゃんと親には断ってきたから安心しなチャイナ」

親とも接触したのか？流親父ギャグ！

「キヤハハ！『娘をよろしくお願いします』だってー」

ウチの親バカまるだしじゃん！

「…はあ」

このアキホというヤツは、兄が言うのもなんだが頭のネジ数本抜けてます。では皆さん。『とある探偵事務所〜アキホがいる風景〜』をご覧ください。

「おいガキ。トランプしようぜ」

仕事しろよ探偵

「いいよー。じゃあ私が鬼ね！」

ハイ会話崩壊！

「鬼だけは譲れねえな」

うわー話続いたよ。

てかジャンケン始めたよ。

「じゃ〜んけ〜ん」

「ポストハーベスト！」

ポストハーベスト？

あ、なんかアキホが勝ったみたい。シンさんが『中古テレビ』でアキホが『いかしたファンキー』を出したからアキホの勝ちなんだっ

てさ。

「ちくしょおおッ！」

泣くほど悔しいか変態

「じゃあいくよー」

てかこの狭い事務所で鬼ごっこするのか

「革命っ」

大富豪始まつてるー！しかも第1手から革命かよ！

「あ、UNO！」

どんなルールだ！

「ぐふふ…俺の勝ちだああああ！」

シンさんが何やら手札をテーブルに叩き付けた

…あー。『フルハウス』ね。うん、最終的にポーカーに落ち着いてよかったよ。

「甘いぜあんちゃん」

とか言いながらアキホが見せた手札はワンペア…。弱っ！

「デメエふざけんな！俺の勝ちだろーが」

おーおーキレとるキレとる

「おやおや、先程ワタクシが革命を行った事を忘れたのでちゅか？」

大人か子供かハッキリしろ。てか革命の効果続いてたのね。

「ちくしょおおおおおつ！」

だから泣くな変態

「…」

？

急にアキホが黙った…

「アウトソーシングっ！」

はい？…ああ、座ったまま寝てるよこのコ。しかもつぶらな瞳全開だよ。寝言意味分かんないよ。

ボクはひとり泣き叫ぶシンさんを事務所に残し、両目全開の妹をおぶって帰りました。

「ムーアの法則っ！」

どんな夢だよ開眼少女。

第6話：『つまみ食いは世の中の真理だって母さんが…』

「ねーねー。シンちゃんて何才なのー？」

「我輩は10万46歳である」

デモン小暮閣下おはようございます

「おおうつ！10万？すごおい！」

信じるな妹よ

どーも皆さんこんにちは。ボクは今日も事務所の家事全般に追われています。

ただでさえアタマが痛いのに、最近では毎日のようにアキホが事務所に遊びに来てます。

妹のアキホは9歳。小学生です。学校が終わると真っ直ぐシンさんに遊びにきます。シンさんにタメ口をきける妹をボクは尊敬します。

「…ですよ。最終的には火炎瓶一気のみしてやがんのー！うひゃひゃ」

なんの話だ！

「さいこーだねその渡り鳥っ！」

アンタ渡り鳥になにさせてんのっ！

2人はテーブルをバシバシ叩いて爆笑してます。

「やっぱりヤマザキは春のパン祭りだよねー」

他になに祭りがあるんだ！

「うひゃひゃひゃひゃひゃひゃ…ぐぐ」

一瞬で寝に入ったよ！ある意味才能だよ変態

「あー。寝ちゃったあゝ…」

つまらなそうにシンさんのホッペをツンツンしてる

「ひまー」

うん、暇そうだな

「ひまー」

だったら掃除手伝え

「ひまー」

わかったって

「退屈でござる」

もういい……………誰？

「わあゝ ネコちゃんだあ！」

ネコ？ホントだっ！いつの間にかソファーにネコが座ってる。

「あれ？」

このネコどこかで…

「ネコちゃん。お名前は？」

「名乗る程の者ではござらぬ」

『寝冷え』だ——————ッ！！

「ちょ…寝冷え！なにしに戻ってきたのさ？」

「おお。あの時の少年！掃除ご苦労」

寝冷えはアキホのヒザの上でくつろいでる

「ネコちゃん寝冷えってゆーの？」

「うむ」

アキホは寝冷えに興味津々のようです。

そりゃそーさ。喋るんだもん。

てかアキホちゃん、ちよつとは驚こつね。

「追手から逃れて街から街へ…気づいた時には再びこの街へ帰っていたのでござるおふん」

急に語尾付け加えんな。それよりアナタ不倫してる事になってますよー。

「前から気になってたんだけど、追手って…寝冷え何かしたの？」

ネコを追うのなんてどうせネコなんだろうけど…ネコの世界を知るチャンスだ。

「うむ。実は…この街一帯を仕切っているボスネコがいるのでござるおふん」

へえ…やっぱりネコの世界にもボスとかいるんだ…

「そのボスネコの娘がべっぴんでござってな……」

まさか…

「つまんじやった」

なにしてんだよエロネコ！

「ダメじゃんつまんじや」

アキホちゃーん！仮にも小学生が『つまむ』とか言わないの！

「なるほどね。それでボスネコが怒ったワケか」

「左様」

ネコの世界も色々大変みたいです。

「ねびちゃんは今からどーするのぉ？」

ねびちゃん……軽くエビちゃん想像しちゃった てへ

「うむ。そろそろ逃げるのにも飽きてきた所でござる。ここは本格的にボスネコをやっちまおうかと……」

勝手に頑張れ化け猫

「加勢しまっせあんちゃん」

アキホちゃんっ！？

「俺さまの手にかかりゃあボスネコの1匹や2匹、ちょちょいのシーサーよ」

ああ…お目覚めですか閣下

「3人とも…かたじけない！」

ん？3人でボクも入ってる？そうかー、うん、そりゃそーだよねー。だってボクが行かなきゃこの小説成り立たないもん。

こうしてボクらはネコのケンカに巻き込まれました。

第7話：『ネコって油断するとすぐ増えちゃうのよねーほら　なんて無駄に繁殖

どーも皆さん。トオルです。さてさて前回人語を話すネコ『寝冷え』のケンカに巻き込まれる事になったわけですが…（シンさんとアキホがやる気満々だから）

今ボクたちは寝冷えの案内で、ここら一帯を仕切ってるボスネコの住みか目指してます。

「ねーねびちゃん」

妹のアキホが寝冷えを抱き上げる。あ、ちなみに『ねびちゃん』は寝冷えのことです。決してエビちゃんこと蛸原　里の事ではありません。

「なんでござるか？アキホ殿」

「ボスネコのトコにはネコちゃんいっぱいいるのー？」

ああ、それはボクも知りたいです。珍しくまともな質問ありがとう。

「うむ。少なく見ても30匹はいるでござる」

「ウシャシャ！全て俺さまがミンチにしてやるあー！」

確かにアンタの手にかかればリアルミンチになりかねませんね変態
探偵

「シンちゃんてつおいのー？」

アキホちゃん？この方は現代に蘇ったサイヤ人だよ？

「シン殿の御力、一目見ただけでヒシヒシと感じたでござるよ」

何者だよこのネコ

「ウシャシャ」

「あははー」

「ニヤハハおふん」

とか笑ってる間にどうやら敵の本拠地に着いたみたいです。

「ニヤアアア！」

「フーッ！」

なんていうネコらしい威嚇の声がチラホラと…正直小便チビリそうやでホンマ。

「さっそく来たみてえだな！」

ああ…今日ほどアナタの存在に有り難みを感じた事はありませんよ閣下。さあ！存分に暴れてやりなさいっ！

「死ねやああ畜生どもがああッ！」

シンさんのナイフが次々と野良猫に突き刺さっていく（動物虐待はやめましょう）

「アタシも〜」

え…アキホちゃん？なにその黒い物体。お兄ちゃんバカだからさ、

その黒いのボンバーマンが使うような爆弾にしか見えないよ

「ちえすとー！」

とか叫びながら投げた黒い物体……てかもう爆弾はネコの群れの中に見事着弾しました。ボク初めて見たよ……ネコが『ギャース』とか言つて空飛ぶところ。

「では拙者も」

おお！行くか寝冷え！『拙者』とか言ってるしなんとなく強そうだもんなー。

わざわざボスネコの娘に手を出す位だもん……きつとネコの世界では名の知れた……って寝冷えクソ弱っ！瞬殺されたよ！リアルミンチになりそうな勢いでボコられてるよ！あ。そこにボンバーマンの爆弾着弾しちやった。さよなら寝冷え……君の事は忘れないよっつーか喋るネコなんて来世になっても忘れねーよボケが。

ああ。もうシンさんの周りは動物愛護団体の方々が号泣しそうな光景が広がってるよ。ご苦労様でした閣下、そのままブタバコにお入り下さい。

そして向こうではまだ『ちえすとー』
爆音 『ギャース』が繰り返されてるよ。エンドレスだよ。

「ウシャシャ！弱すぎて話になんねーなクソネコまんま共！」

ウチの閣下は『もひもひランジェリー』読みだしました。

「と……トオル殿……」

ん？どこからか声が

「下でござる...トオル殿」

下？

「うわっ！寝冷え生きてたの！？」

そこにはベホマでも効かなそーな感じな重症の寝冷えがいた

「油断してはならぬぞ...まだ...『あやつ』がおるゆえ...」

「大丈夫だよ寝冷え。シンさんに勝てる生物なんて存在しないから」

そう言ってシンさんを見てみると

「デメエええええ...」

うわー！ー！なんかネコにキレてる！

「あやつは！」

寝冷えが言ってた『あやつ』ってあのネコみたいね。ま、ウチの変態にかかれば骨つき肉決定ですけど

「よくも俺さまの『もひもひランジェリー』をおおおお」

どうやらネコに『もひもひランジェリー』を引き裂かれたようです。てか泣くな変態

「ニヤア！」

うん。ネコもなんか怒ってる感じですか

「ねえ寝冷え、あのネコなんて言ってるの？」

「うむ。『あんたらよくもあちきの大事な子分…いやフレンズ共を殺してくれたわねー』でござるおふん」

『ニヤア！』にそんなロングな意味が込められてたのかー！ってか『フレンズ共』ってなんだ！『頭痛が痛い』みたいになってんじやねーか！

「あやつがボスネコでござる」

なるほど。

「死ねクソパラッパラパーがああ！」

シンさんがナイフを投げようとした瞬間

「ひでぶっ！」

気付いた時にはシンさんは北斗の拳のザコキャラみたいなやられ方で倒れてました。

向こうでは『ちえすとー
の日の午後でした。

』

爆音

『ギヤース』が続いている夏

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7606a/>

噂のたんてーさんっ！

2010年12月17日14時59分発行